

つたので、秘書のライネン女史に何処産のものかと聞いたら、「勿論あなたのお国、日本産ですよ」と、呆れたような顔をして返事をした。戦前は寒天は日本の特産であつたから、こんな質問をする方が悪かつたのかも知れない。

(茨城大学文理学部生物学教室)

北米合衆国化石藻類学界の近況

小 西 健 二

名実共に化石藻類学界の大御所であつたウィーン在の PIA を失つてから既に 10 余年になるが、この間北米では在 Colorado School of Mines の JOHNSON 教授が幾つかの入門書の刊行を含めて学界に幾多の貢献を続け、英国の WOOD、フランスの LEMOINE、ノルウェイの HØEG 等と共に此界の指導的地位にある。他に現在此の地で最も活躍している化石藻学者としては、在 Missouri 大の PECK、在地質調査所 (Denver) の REZAK、在 Miami 大の GINSBURG、在 Nebraska 大の ELIAS の諸博士があげられるが、以下簡単に此等北米の人々の近況を本欄を借りて御紹介してみよう。

PECK 博士は化石輪藻の泰斗として既に数十年来ひろく知られているが、現在 Missouri 大学地質教室主任として多忙な日を送っている。目下 North American Mesozoic Charophyta なる大部の monograph を地質調査所 Special Paper に投稿中で、執筆中の Treatise on Invertebrate Paleontology の Charophyta の項と共に、此の分野の集大成として、また手引としてその刊行が待たれている。この 3 月に地質調査所で開かれた非海成堆積物のシンポジウムで Phylogeny and ecology of the Charophyta なる興味深い総括的報告を行い、中でも同類の示相化石としての役割では専門外の者の注目を集めた。

REZAK 博士は、地質調査所の化石石灰藻関係責任者で、Type 標本の管理にあたつており、若手で将来最も活躍の期待される 1 人である。目下は Texas の二疊系はじめ各地の標本採取に専念している。Syracuse 大の学位論文である先カンブリア及びカンブリア紀の層状藻類 (Stromatolites) の報文が地質調査所報告として近刊の予定で、略同内容の要旨が夏のメキシコの万国地質学会議に提出されている。

GINSBURG 氏は、古く BLACK が Bahama 諸島で観察した如く、南 Florida で現生の Spongiostromata が環境の変化に応じて生活型を変える様子を詳しく研究し、特に従来と異なつて protected water から報告している点は特筆される。この種の研究(比較生態学)が少ない折から注目されよう(Recent stromatolitic sediments from South Florida, 1955 年米国石油地質学会総会報告)。

JOHNSON 博士は停年を年後に控え、氏の最近 5~6 年間の仕事の総括である Saipan, Eniwetok, 北大東島, 沖縄等の新生代珊瑚藻類の monographs の脱稿に多忙で、一部は既に投稿済だが、結果は西南太平洋域の新生代 flora の知識を一層増すことにならう。別に同氏の研究として注目を惹くのは、*Archaeolithophyllum* の発見で “*Archaeolithophyllum*, a new genus of paleozoic coralline algae” として J. Paleont. Vol. 30, No. 1, pp. 53-55. に発表されている。*Solenopora* の類が果して珊瑚藻の原型に結びつく石灰藻か否かという問題が未だにはつきりしないため、新白堊紀まで追跡できる珊瑚藻科の系統はここで途絶え、決手となるべき conceptacle が *Solenopora* 類に見出されぬ事実は、PIA の“最表部で石灰化されなかつた為化石は保存されぬ”という仮説にゆだねられているままである。この様な時イシゴロモ (*Lithophyllum*) に体制の非常によく似た石灰藻が北米 Texas と Missouri の上部石炭系から見出されたことは単に白堊紀から石炭紀への遡行に止まらず、珊瑚藻科の系統を追う上の重要な新知見といえる。問題の石灰藻は perithallus と hypothallus の分化が非常に明瞭な上、構造・conceptacles の形等は *Lithophyllum* に酷似する。特徴として coaxial の比較的薄い perithallus に比し、非常に厚い hypothallus と、これをつくる細胞の大形且つ多角体(直方体でない!)である点があげられよう。上記論文にはのつていないが、JOHNSON はその後有節珊瑚類の化石も上部石炭紀から得られたことから、有節、無節両類の分化、更には *Lithothamnium* 型と *Lithophyllum* 型も石炭紀の略同時頃に分化を完了していたと考えている(1955 年 11 月米国地質学会総会報告: Ancestry of the Coralline Algae)。尚同氏は小西と共に古生代各紀毎の石灰藻の総括を試み、将来の研究への素地をつくることに努めてもいるが、旧石炭紀の項は脱稿近刊の予定で、これには若干日本の材料を含んでいる。

他に 4~5 年来、共生の問題をはじめ、常に植物学の立場から面白い問題

を提起して来た ELIAS 博士や同傾向の問題を本春石油地質学会年会席上報告した Utah の RIGBY 博士等の研究も重要である。併し、ここしばらくは主流として、正統派記載古生物学が続きそうである。

化石石灰藻の資料は、未だにそれ程不足且つ断片化しているといえるのかも知れない。
(東大理学部地質学教室・米国コロラド大学留学中)

ヘンメリング博士の玉野岡大 臨海実験所来訪報告

猪野俊平

ドイツの Max Planck 海洋生物研究所の HÄMMERLING 博士は、その一門の K. L. SCHÜLZE, G. WERZ, H. STICH および K. BETH の諸博士らと共に、欧州産のカサノリ属の *Acetabularia mediterranea* および *A. crenulata* などを材料にして仁物質、核物質の究明から、また体に隔壁のないこの属植物の特性をうまく利用して核細胞質の異種のものへの流し込み移し換えといった器用な実験発生学的研究をされ細胞質内のエネルギー物質の解明などで発生学や細胞遺伝学の方面に多大な貢献をされている一流の学者であるが、今秋、東京で開催される国際遺伝学シンポジウムの学会から招へいされたのを機会に、東洋のカサノリ属を採集する計画をされ、琉球で *A. ryukyuensis* カサノリ外1種を、折柄、琉球大学におられた瀬川宗吉氏らの御世話でうまく適期のものを採集され、那覇から7月18日夜半に岩国へ飛行機でつかれ、19日午後岡山駅へつかれた。ヘンメリング博士は香港で買われたとかいうナイロンシャツの夏姿で、肩に沖縄採集のカサノリの入ったナイロン鞆を大切に持たれ、自動車の乗り降りにも一切肩からはずされないといつた慎重振りで実験材料を大切にされる心構えには全く感服した。材料はポリエチレン製の割れない瓶(我国にもあるが、蓋のねじの工合などはさすが独乙製と思つた)に入れ、この瓶の一杯つまつたナイロン鞆には氷を入れて温度の上昇を防いでおられた。

7月21日の干潮時に、岡大臨海実験所の採集船大泡丸が園の州へ川口四郎所長はじめ、ちょうど来所されていた阪大神谷宣郎教授の門下生らと共に